

2016.08

スーリールファム通信

さわやか福祉財団シンポジウム

「今こそ、まちづくりを始める時」レポート

2016年8月31日(水)。

台風が過ぎ去り、ここ数日の雨天を振り払うように暑い日。

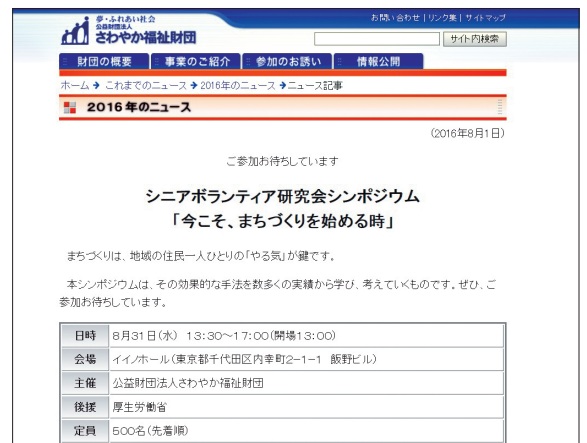
イノホールでさわやか福祉財団の「シニアボランティア研究会シンポジウム—今こそ、まちづくりを始める時」というシンポジウムが開催されました。(後援：厚生労働省、協賛：住友生命保険相互会社)

基調講演は株式会社studio-Lの代表取締役山崎亮氏、IIHOE「人と組織と地球のための国際研究所」代表の川北秀人氏。

後半は堀田力氏、樋口恵子氏も含めて、パネルディスカッションが行われました。

パネラーには東大の高齢社会総合研究機構特任講師の後藤純資、認定NPOコミュニティサポートセンター神戸理事長の中村順子氏、日本社会事業大学社会福祉学部准教授の菱沼幹男氏といったそうそうたるメンバー。

お一人ずつ現在の研究や活動の報告があり、意見が交換されました。いずれも興味深い実例を含め、実際の現場でのすったもんだしながら進んでいる様子がリアルに語られ、面白いシンポジウムでした。



印象に残ったポイント

(※発言メモなので、ちょっと厳しい言いぶりの方もいらっしゃいますが、シンポジウムの活発な様子を感じてください)

POINT
1

4~5人でもいいから、とにかく「場」に集まって何かワークショップ的な活動を始めてしまうこと(行政じゃないんだから、やたらにハードルをあげなくていい)。

POINT
2

行政と組んだら、地域の高齢者10人ぐらいを紹介してもらい、個別に訪問してまずは友達になること。そして集まってもらう。その人たちが友人をつれてくる。

POINT
3

毎日どこか近所に出歩く高齢者と週2、3回しか外出しない高齢者を比べると歩行障害になる確率が4倍違う。
とじこもる→社会性が落ちる→口腔機能が落ちる→精神的・心理的機能が落ちる→身体機能が落ちる。

POINT
4

これからの高齢者の傾向「つながりたい、けど、しばられたくない、選択縁型」人を巻き込むことが必要。参加していない50%の人たちを地域に担ぎ出したい。

POINT
5

国の目算として、週1回(2h)、6~7人程度の高齢者を集まる場づくりをし、社会参加→見守り→訪問介護として機能を持たせたいと考えている。

POINT
6

行政はとにかく広報がヘタ。町会のトップに声かければ広報したつもりになっている。全然一人ひとりに「地域に出てきて」「力を発揮してほしい」が伝わっていない。「お元気ですか？」とお伺いをしているだけ。しかし、その「元気老人」に力を発揮して役だってほしい。自分たちのために。そこでその配布物に講座案内を同封して配布した、参加者が増えた。その人たちに講座を受けさせ、やりたい活動（料理、教育、外国人、農業…）などのプログラムをつくり活動し、広げた。神戸は現在、こうしたNPOが100、行政の主催が100、他を合わせても、まだまだ後1500の場づくりが必要。しかし、30万人の元気高齢者がいることがわかっているので恐れることないと感じている。

POINT
7

何もできないことがない、という高齢者がいるが、共稼ぎ宅の子ども相手に「音読の宿題を聞いてあげる」といった役割など、アイデアは考えればいっぱいあるので、参加してほしい。

POINT
8

人生最終的には家族はともかく、また、国の支援も当然だが、「小さいコミュニティ」が人生の最後の受け皿。そこを重視すべし。将来、家族のある高齢者、家族のない高齢者という**家族格差社会が訪れる。第二の敗戦というぐらいい大変な事態になるはず。**（樋口氏）

POINT
9

各地で地域の場づくりの事業をやっているがアンケートとデータをとること。都市型、地方型などいろいろなタイプがあり。掘り起こせる場や人材が眠っている。特に無償ボランティア希望者などがニーズを超える地域もあり。新潟市は昔からの活動として「**実家の茶の間運動が普及**しており、「場」づくりが成功している地域。ニーズにほぼ100%応えている。

POINT
10

若い人、多くの人を巻き込むには「美しい」「可愛い」「わかい」「素敵」「カッコいい」「おしゃれ」「気持ちいい」「美味しい」といった感性に訴える魅力を場に持たせる。「正しいこと」「必要だからやらねばならぬ」な理性派な人はもうすでに活動しているので、その理性派に加えて、若者など、**感性派も巻き込むべき、それで力が増大する。**

POINT
11

行政はアンケートを取ると全部まとめた集計をしがち。ぜひ「年代別」にとるべき。年代によってニーズ、「重視している」「満足している」の傾向が全く違う。

POINT
12

自治体の行事や役が多すぎてまわらない地域は、全員アンケートなどで行事統合や廃止を検討し、今の時代にあった活動と役割、進め方にする。

POINT
13

行政に向けては「85歳以上が多くなった地域だから時間の使い方、行事の取り組みを変えましょう」と提案したい。

POINT
14

反対派（役所の中間管理職など）には、特に理由はない場合がほとんど。「知らない」「わからない」「不安」「不満」が反対させているだけ。トップと現場は賛成が多い。効果的なのはそうした部課長クラス全員と直接会って、しゃべってしゃべって（合宿が有効です）、すべて不満や不安を吐き出させる。そうして翌朝、握手をして味方になっていただく。

POINT
15

地域に「支援されるだけの人」を作らないこと。かならず何か役割が果たせる。

POINT
16

モチベーションはそれぞれ。男性高齢者には過去の肩書きをつけて固有名詞で招集のお願い状を出すなど工夫して担ぎ出す。アイデアを使って引っ張り出してどんどん活躍してもらいたい。